日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい ニュース

第２５号
（２００３年１０月１日）

50回大会企画特集号

発行所：〒565-0871　吹田市山田丘１－２
大阪大学人間科学部　渥美公秀研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
電話＆Fax: ０６－６８７９－８０６６
発行人：渥美公秀　　編集担当：廣岡秀一

★★　*第50回大会印象記*　★★

第50回大会に参加して

九州大学　　山口裕幸

節目の50回大会である。春の京都、アクセス抜群のJR京都駅のすぐ隣のキャンパス・プラザでの開催であった。大会の開催準備にご尽力いただいた方々に深く感謝申しあげたい。今回、私は、グルダイ学会が日本の社会心理学界に半世紀に渡って刻んできたものは何だったのか、そして、これから何を創りあげようとしているのかを確認できたらいいなあと期待して大会に参加した。

これまでの学会の足跡については、休憩室に展示された三隅二不二先生の数々の思い出の品々が雄弁に語っていたように思われる。気の遠くなる程の膨大な数の実証研究・理論研究、Kurt Lewin Award授賞に代表される研究の質の高さ、学界への貢献度、いずれも特筆に値する功績である。もちろん、幾多の先生たちの支えがあってこその半世紀であることは重々承知しつつも、やはりこれまでの日本のグルダイの礎は三隅先生を抜きには語れないことを改めて感じさせられた。ただ、そのグルダイ学会が日本の学界に何を残してきたのかについては、必ずしも明確な振りかえりはなされているようには感じられなかった。学会の半世紀を支えてきてくださった先生方への敬意を大切にしながら、次への出発点とするために、これまでの足取りを確認する作業も必要なのではないかというのが、参加しながら感じた私の率直な気持ちである。

一方、これからのグルダイ学会はどうなっていくのか、という点については、会員総会で渥美新会長から示された「社会のニーズに呼応した夢のある個性的な学会」構想を聞くとともに、アジア社会心理学会との連携強化、大会における院生セッションやEnglish Sessionの開催､大会の前日に開かれた英語での論文の作成指導セッションの開催など､「国際化」をキーワードにした取り組みの実現を見て、おぼろげながらグルダイ学会のオリジナリティーの創発が進みつつあることを感じた。活動内容が社会心理学会と同じでは、ふたつの学会に参加することの意義は薄くなる。グルダイならではの独特の活動・会員サービスは、他にもあるかもしれない。会員一人一人が自由に意見が言えて、それが反映されていくようになれば良いなあと、期待を込めて思った。

活動のオリジナリティー創発の動きだけでなく、これからのグループ・ダイナミックス研究がどのように展開され、進歩するのかという問題に関連して、一日目総会直後のシンポジウムで展開された議論は面白かった。マイクロ・マクロ・ダイナミズム・アプローチをとっておられる結城雅樹氏、自己アイデンティティーと文化の相互作用過程を対象にコネクショニズムの観点からアプローチされている嘉志摩佳久氏、社会構成主義をメタ理論として実践を重んじるアプローチをとっておられる永田素彦氏・杉万俊夫氏の４氏が率直に意見を闘わせてくれたおかげで、色々と考えさせられた。嘉志摩氏が絶妙の間合いで議論を刺激し、結城氏と永田氏・杉万氏の間で、実証と実践でどちらが研究として意味があるのかをめぐってそれぞれの見解が提示された。研究者にはそれぞれに依って立つグラン

ド・セオリーがあってよく、それぞれが切磋琢磨することによって研究は発展するのだと思う。私個人としては、「アクション・リサーチだよな」との思いを改めて強くした。葛藤はあっても多様なアプローチがひしめき合って互いに刺激し会うことができる、そんな闊達な研究者交流の「場」として今後のグルダイ学会が存在していけるのではないかと、そんな期待を感じた。

期待したいこと

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程
谷口　淳一

日本グループ・ダイナミックス学会第50回大会は３月22・23の２日間にわたりキャンパスプラザ京都にて開催された。第50回大会という記念の大会、これまでの秋開催から春開催への移行、そして大学施設ではない一般会場での開催と、あらゆることがこれまでとは異なり新鮮な印象を受けた。会場となったキャンパスプラザ京都は、遠方からの方も関西圏の方も非常にアクセスしやすい京都駅前という最高の立地にあり、夜の飲み会での場所にも事欠かなかったのではないかと思う。３月という時期については、院生としては比較的ゆとりのある時期であり、充分な準備ができて発表に臨めるという点ではとても助かったと思うが、先生方は学期末の大変忙しい時期であり、大変だったのではないかと推察する。

大会は２日間にわたって行なわれたわけであるが、前日の21日にも「英語論文ワークショップ」が開催された。初級者コースと中級者コースに分かれて行なわれたが、私は初級者コースの方に参加させて頂いた。英語論文を書く際の注意点を事細かに説明して頂き、「英語論文を書きたいけど、どうしたらいいか分からない」という私のような院生にとっては非常に有意義な時間であった。ただせっかくの著名な先生の講義であったのに、受講者が20数名と少なかったことがやや残念であった。できれば次回以降も同様のワークショップを開催して頂き、多くの院生が参加できればと思う。

＜ナカニシヤ出版広告挿入＞

さて１日目は、午前中に個人発表、午後からは総会とメインシンポジウム「第100回大会のグループ・ダイナミックスに向けて」、２つのワークショップとEnglish Session、そして懇親会が行なわれた。個人発表の方はベテランの先生から若手の院生までさまざまな研究者がさまざまなテーマの研究発表を行なっており、どれも大変興味深く拝聴させて頂いた。ただ、部屋がやや狭かったこと、全体討議の時に聴衆の数が減って、発表者間だけでの質疑応答になってしまう場合が見受けられ、やや残念が気がした。メインシンポジウムは、題目通りの50年後ではなく、まさに今、グループ・ダイナミックスがどこに向かうのかを巡る議論となり、シンポジストの先生の熱い議論に真剣なまなざしでもって耳を傾けている会場の先生方が印象的だった。そのような会場の先生方がどのような意見をもたれているのかが気になったので、会場からの質疑の時間はやはりあれば良かったのにと感じた。ワークショップの方は「調査的面接の技法」「SEMFAQ－共分散構造分析に関する10の質問」の２つが並行して行なわれた。どちらも興味深く、できることならどちらにも足を運びたかったのだがそれは不可能であったため、前者を聴講させて頂いた。調査的面接という「やりたいけど、どうしたらいいか分からない」という手法に関する第１人者の先生方の講演は大変勉強になったが、何よりも講演者の先生方の研究に対する情熱が伝わってきた。「ほんまに研究好きやねんなあ」と生意気なことを考えつつ、先生方がおっしゃっていた「熱いハートでクールな分析」というキャッチフレーズを胸に留めさせて頂いた。SEMに関するワークショップの方も大変に盛り上がったようであり、聴講できなかったのはかなり残念だったが、とても身近な先生方なので今度、個人的にお聞きしようと思っている。

２日目は、個人発表、ワークショップ、院生セッション、English Session、そして公開シンポジウム「自己認識のポジティビティと適応の個人差・文化差」が開催された。近年、個人の適応を巡る問題について多くの研究が行なわれ、自己認識のポジティビティが適応にとって重要であるという見解が示されている。しかし、いわゆる幻想の枠内でポジティビティを高めていれば適応的であるという安易な考えに各先生方の議論は警鐘を鳴らす内容であると感じた。個人的にも興味を持っている領域であり、今後の研究の方向性の指針として非常に有益な議論だった。

＜北大路書房広告挿入＞

生意気にコメントさせて頂いたが、個人的には大会期間中、実は自分の口頭発表のことで頭が一杯で、あまり落ち着いて学会に参加できなかった。何よりも飲み会を楽しめず、発表は１日目に集中してもらって、２日目は飲み会と観光の日にして頂ければ嬉しいのにとあり得ないことを考えてしまった。冗談はさておき、本大会は今後の学会の行く末を占う意味でも重要であったと感じた。学会がどうなるのか不安な声も聞かれるが、一院生としては学会が現状の形で存続することを望みたい。

★★　５０回大会ワークショップ特集　★★

★★　英語論文ワークショップ　★★

「英語論文の書き方ワークショップ」に参加して

東京理科大学理学部　　竹尾　和子

平成15年3月21日、京都で開催されたグループ・ダイナミックス学会第50回大会の前日、グルダイ主宰の「英語論文の書き方ワークショップ」に参加した。

英語論文の執筆経験のない私は、初級コースと中級コースのうち初級コースを選択した。初級コースの前半は国際基督大学の笹尾敏明先生が講義をなさった。講義内容は、英語論文執筆にあたっての心構えから始まり、ＡＰＡスタイルとは何か、ＡＰＡスタイルに基づく論文の書き方、英語論文特有の論の展開や表現方法、英語論文熟達方法など、実に豊富であった。先生はこの豊富な講義内容を分かりやすい英語で、時にユーモアを交えて話してくださり、我々は飽きることなく充実した気持ちで講義を受けることができた。さらに、ご自身の豊富な海外研究のご経験を踏まえて、日本人が陥りやすい問題点やその対処方法を教えてくださった。笹尾先生の講義を通して、高いハードルに思えた英語論文執筆がぐっと身近に感じられた。英語論文執筆に向けて大きな一歩を踏み出せたと感じている。

初級コースの後半はニュージーランドにあるVictoria University of WellingtonのJames Liu先生が担当なさった。Liu先生はまず講義の初めに、おもむろにメモをとりだし「起承転結」と日本語で言われた。日本ではこのような論の立て方が典型となっているが、英語の論文ではそのようなスタイルをとらない、というコメントから講義を始められた。では、英語論文ではどのようなスタイルをとるのか？この点について、「ある著名な研究者」（Liu先生曰く）が書いたとされる原稿の校正初期のものと校正最終段階のものを配られ、原稿が英語論文スタイルへと校正されていくプロセスを具体的に示されながら説明してくださった。その際、受講者一人一人に原稿の各段落における重要な文章を抜き取らせるなどの工夫をなさり、我々は英語論文特有の発想や論の立て方について十分な理解ができたと思う。

全体を通して、山口勧先生をはじめ、ワークショップを企画なさった先生方が、我々受講生の現状を十分に考慮した上で、その現状を乗り越え、国際レベルの研究者へと成長して欲しいという思いで講義の計画を立ててくださったことが十分に伝わってきた。来年は、是非とも自分で書いた英語論文を持参して、中級コースに参加したい。“英語論文が書ける研究者”へと一歩ずつ進んでいきたいと思っている。

英語論文の書き方ワークショップへの参加体験

日本学術振興会特別研究員・早稲田大学教育学部
安達　智子

一雨ごとに寒さもゆるみ春めいてきた3月、第50回大会の英語論文の書き方ワークショップに参加、初心者コースで13名ほどの方々とご一緒させていただきました。3時間にわたるセッションの前半は、国際基督教大学の笹尾敏明先生にご指導いただきました。それぞれの自己紹介に始まり、ウォーミングアップとして日本語と英語を交え1時間30分盛り沢山の内容でした。まずは論文執筆にあたっての心構え、そして標題、要約、問題提起、方法、結果、考察、文献、注釈、図表、さらに付録と、論文執筆にあたり必要な事項を広く網羅するかたちでご説明いただきました。心に留めておくべき事は、いかにして読者を

魅了するか、ここにポイントが置かれていたように思います。つまり論文の価値は、結果とその考察だけにあるのではなく、まずは読者の目にとまる標題を、そして簡潔な要約、興味をそそる問題提起、見易い結果の表示、さらに得られた知見についておおいに議論して締めくくる。こうしたかたちで、論文の作成全ての箇所を通して重要なのは、読者の存在を念頭においた“reader-friendly”な姿勢だという事です。

30分間の休憩を挟んだ後半のセッションでは、Victoria University of WellingtonのJames Liu先生にご指導いただきました。こちらのセッションは全て英語で行われました。英語での授業に不慣れな私でしたが、予めご用意いただいたレジュメに助けられ、どうにか付いて行く事が出来ました。はじめに執筆のキーポイントとして、日本語をそっくりそのまま英語に直す発想を捨てること、文法に忠実になるよりは何を主張するか、研究の価値をいかにして伝えるか、こうした点を念頭に書き進めるようアドバイスいただきました。続いて、Liu先生ご自身の論文の初稿と修正後のサンプル用いて、何処が説明を曖昧にさせているのだろう、どの様に整理すれば要点が伝わり易いか、筆者の主張は一貫しているか等について皆で話し合い確認しました。こうした実例を用いたエクササイズのなかで、ひとつの段落に複数の主張があると理解し辛くなることや、文章には意外と無駄な部分が多いことなど沢山の発見がありました。

ワークショップに参加して、「英語で執筆する」という課題への垣根が随分と低くなりました。また、今回お話いただいた論文執筆の視点は、日本語での執筆においても十分に配慮すべきポイントだと思います。ご指南いただいた沢山の事柄を実践に生かすべく、読者を魅了するreader-fliend1yな論文執筆に向けて努力していきたいと思います。ご多忙のなか、貴重なワークショップを企画していただきました山口勧先生、そして、大変有意義なご指導をいただきました先生方に心より感謝を申し上げます。

★★　*調査的面接の技法－何をどこまで教えられるか－*　★★

企画担当者から

東北大学　　鈴木　淳子

当ワークショップでは、１）調査的面接法の大学での教育実態と問題点（広島大学の浦光博さん）、２）面接の魅力とむずかしさ（静岡県立大学の西田公昭さん）、３）今後の研究への提言（東京国際大学の角山剛さん）について、面接法を含む様々な調査法を用いて精力的に研究を重ねておいでになるお三方に率直に論じていただきました。

どなたもお話の内容が非常に実践的で示唆に富んでいたため、企画者としての立場を忘れ、身を乗り出して聞いてしまいました。一般に、学会では互いの研究成果を聞くばかりで、研究者の研究そのものに対する姿勢、研究動機、メソドロジーに関する基本的な考え、調査現場での体験や問題対処法などについて聞けることはめったにありません。しかし、当ワークショップの参加者は、のめったに得られない貴重な情報を論者のお話を通して共有することができました。これは新鮮で楽しく、おまけに有意義な経験でした。フロアからも具体的なご質問や経験のご披露があり、企画者冥利につきる活発で充実したワークショップになりました。ただひとつ残念なことは、当初の大きな目的のひとつであった、学生参加者からの具体的なご相談を受けてフロアと論者が交流する機会が作れなかったことです。時間配分や雰囲気作りがうまくできなかった企画者の責任だと反省しております。

NL読者にも情報を共有していただきたく、以下に各論者のお話の要約をご紹介します。

１）浦さん―面接法にふさわしい調査テーマの選択と事前準備の重要性―

一般化できる範囲内で面接法の基本的な知識や技法や倫理的配慮を大学で教えることは当然である。しかし、臓器移植やDVなど、調査法として面接法が最適だと思われるテーマにこそ、一般化された面接法の知識だけでは対処できないという矛盾がある。そのため面接を行う学生には個別の指導や訓練が必要になる。学生は「とりあえず」面接を行うという安易な姿勢で面接法を採用するのではなく、面接がテーマに本当に一番ふさわしい調査法であるか否かを確認しよう。面接にとりかかる前に十分な文献研究をし、概念をきちんと想定し、分析手法についても把握しておくことが大切なことは言うまでもない。

２）西田さん―温かな心とクールな分析の必要性―

人と話をすることが好きだから面接を用いた研究を行っている。面接法はテーマの全体

像の把握に重要な役割を果たす。生産性を考えず、長期的な研究スパンで取り組み、インフォーマントと一緒に生きている時間を共有しよう。自分の専門性を生かしてインフォーマントの相談相手になれるように、事前に情報を集め、社会的スキルも備えておこう。しかし同時に、情報をクールに分析し科学的に検討することも必要である。面接のむずかしさは、コストパフォーマンスの低さ、ラポール形成の困難さ、共感的理解の限界、守秘義務などの倫理を考慮するゆえの限界である。しかし、面接法は補完的な道具などではなく、フィールド研究としても大切であり、自分が現場にいるというリアリティが実感でき、「理解と実験室」との行き来ができ、スリリングでチャレンジングな魅力に満ちている。

３）角山さん―面接法による調査への５つの提言―

まず面接法を用いた内容の本を読んで、集めたデータをどう解釈し記述するかへの理解を深め、研究テーマが決まれば、面接法を用いることが本当にふさわしいかどうかよく考えよう。面接法ではデータが大切に扱われるという長所があるが、外国人などが対象になるとことばの壁という問題が起こりうる。また、面接なら誰でもできると思うのではなく、面接者としての自分の適性についても考えてみる必要がある。提言したいことは、(1) 面接法と質問紙法を両立させよう、(2) 面接に慣れておこう、(3) 面接によってより本質に迫ることができるテーマを選ぼう、(4) 質の高いデータを収集しよう、(5) 面接場面で自然に振る舞える対人スキルを身に付けよう、である。

調査面接の可能性と限界　－ワークショップの感想として－

名古屋大学大学院教育発達科学研究科
吉澤 寛之

久しぶりに訪れた日本の古都、京都で体験した初めての日本GD学会。学際的雰囲気の漂う会場で行われた本大会は、他の大会とは趣が異なり、多様な試みがなされている興味深いものであった。中でも本ワークショップ（WS）は、代表的な研究手法の中で、データの信頼性や妥当性の確認が困難であるために、他の手法と比較し軽視されている調査的面接法を取り上げ、その重要性を再確認させるものであったように思う。

本WSでは、企画者の鈴木先生により、調査的面接法に関するテキストや大学の講義があまりにも少ない現状が指摘された上で、話題提供者の御二人の先生により、調査的面接の実際や長所・短所について、教育的な観点から様々な問題提議がなされていた。浦先生の発表では、調査的面接法を用いた研究の事例を、実施した方法や結果に即して紹介され、いくつかの問題点が指摘されていた。また、西田先生の発表では、面接がいかに面白いものであるかを多くのヴィヴィッドな経験談と共に紹介していただき、短所を補ってあまるほどの調査的面接法の長所について語られていた。さらに、指定討論者である角山先生のコメントでは、調査的面接法において最大の問題点であるデータの信頼性が、質問紙調査においても保証されているかどうかは怪しいものであることを指摘され、話題提供者の先生方と活発な議論をされていた。

これらの先生方の議論を拝聴し、調査的面接法により得られたデータにおける測定内容の代表性はどう考えたら良いのかという疑問を抱いた。話題提供の先生方が紹介されていた研究事例では、今回特殊なサンプルが対象とされていた（臓器移植者、DV被害者、カルト教団元信者）。これらの対象者はほとんどの人が経験したことのない体験をしており、そこで得られた知見が人間行動の普遍性を捉えているのかといった疑問を感じた。

例えば、先行研究からは導き出されないある知見が、調査的面接により得られたとする。しかし、得られた知見が特殊なサンプルに還元されてしまえば、結果としてその知見の頑健性は損なわれることとなる。調査的面接を用いるにしても、理論的背景や先行研究に基づく測定概念の明確化は重要な課題であるが、もし特殊なサンプルを用いて新たな知見が得られたとしても、それらの知見がどのように先行研究と関連するのかを検証することは困難なものとなる可能性もある。従って、サンプルの特殊性の問題を解消する目的で他の研究方法を併用する必要性も生じ、補完的ではない単一の手法として、調査的面接法を確立することは困難であるように感じた。

最後に、WSへのわずかなリクエストをさせていただきたい。今回のWSは初の試みであるため、調査的面接法に関する本質的な長所･短所が主に取り上げられていた。今後はより同手法の理解を深めるために、参加者が自ら実施した調査的面接に関する研究を持ち寄っても良いのではないかと感じた。自分が行った面接を客観的な視点から経験豊富な先

生方に指摘していただくことにより、方法論の客観的な明確化が可能になり、加えて教育的指導のポイントを見出せるのではないだろうか。また、洋書では調査的面接法に関する文献が豊富にあるということなので、それらの文献を紹介し、その内容に関する議論を深めることも有益な示唆を与えると思われる。今回のWSは、社会的情報に関する認知構造を研究している私にとって、調査的面接法の自分の研究への有用性を確認させてくれる大変有意義なものであった。

企画、話題提供、指定討論をされた先生方、さらにGD第50回大会を主催されたスタッフの皆様に感謝しつつ、感想を終わらせていただきたい。

★★　SEMFAQ－共分散構造分析に関する10の質問－　★★

SEMFAQ: to be continued somewhere?

大阪大学大学院人間科学研究科
三浦麻子・狩野　裕

われわれは先の第50回大会で「SEMFAQ－共分散構造分析に関する10の質問」と題したワークショップ(WS)をさせていただいた．このWSを企画した趣旨は、共分散構造分析(SEM)を自己のデータに適用しようと試みる応用研究者の多くが突き当たるさまざまな問題(FAQ)に対して、より実践的な立場を意識した形で方法論者からの回答を示そう、というところにあった。「より実践的」という表現はむしろ「より泥臭い」とした方が適切かもしれない。事前に準備したFAQはいずれも、美しいデータを利用したエレガントな方法論の講釈からはうまく推し量れない、生々しいゆえの瑕疵を持つかもしれないデータを扱う際に、応用研究者がしばしば懊悩することに関わるものであった。

さて当日は、興味深い他のプログラムたちとパラレルに開催されたこともあり、どの程度の方に関心をもっていただけるか、ギリギリまで非常に不安だった。企画者の三浦においては、青くなって震えていたといっても過言ではない。というのも、日本心理学会で過去数度類似のWSをした折には、われわれ演者自らがドアの前に立って「客引き」し、ようやく何人かの方々にお集まりいただくというのが通例だったからである。しかしそれは幸いにも杞憂に終わった。ドアの前で立礼さしあげる暇もないうちに、80余名の方々がご来場くださったことは、会員諸氏のSEMに対する関心の高さを説明するよい指標となった。

特に、大学院生をはじめとする若手研究者だけではなく、中堅あるいはそれ以上の方々のご参加が多くあったことが、われわれにとってもっともうれしいことであった。SEMを応用研究者たちが本当に「ものにしていく」ためには、特に学会誌レベル以上の研究論文において、その適用に関するcriteriaを確立し、後代の範とすることが必要不可欠である。SEMを用いた論文はこれからどんどん投稿されてくる。方法論の雑誌なら、SEMのことはSEM研究者にとなるだろうが、応用研究の場合はそうはいかない。SEMを用いた論文の査読を依頼された場合に、「私はSEMのことは分かりません」は断る口実として通用しないのである。そこで的確なコメントをすることができなければ、必然的に当該研究分野におけるSEM適用例の質は低下してしまう。そうならないためにも、査読を通じてSEMに触れる機会が多いはずの研究者層にこそ積極的な関心を抱いていただきたいと思っていたから、参加者の顔ぶれは大変ありがたいものであった。具体的な内容については下記ウェブサイト1をご覧いただきたいが、10個のFAQに対するbrief answerと特に重要な3つに対する詳細なcommentary、そして質疑応答で構成された2時間は、少なくともわれわれにとっては「あっという間」であったことは確かである。

WS終了後、少なからぬ会員の方から「続きはいつやるんですか」「本は書かないんですか」「合宿企画にしませんか」といったようなコメントをいただいた。もちろん（WSの〆でも申し上げたように）詳細に解説することのできなかったFAQや、事後アンケートに寄せられたいくつかの質問について、どのような形になるかはまだ分からないが、継続して情報発信をしたいと考えている。ただし、その際に意識したいのは、究極的には「方法論者と応用研究者のコラボレーション」となるべく、応用研究者側も努力を惜しまぬことである。方法論者も、単にチュートリアルをするだけではなく、応用研究者からのフィ

ードバックを求めている。互いに有意な共同研究2が成立してこそ、WSで本当の成果が得られたと言えるのではないか。

そして最後にわれわれが「本当に伝えたかったこと」を。SEMが教えてくれるのは「取っ（てしまっ）た」データの処理テクニックではない。応用研究者は、SEMをデータに適用することによって、分析対象となるデータ・検証すべき仮説モデル・そして学問的パラダイムにどう対峙しているか、その際に研究者としていかに真摯に振舞っているかを試されているのである。SEMは、モデリングの自由度が高いがゆえに、応用研究者が担うべき責任もまた大きい。多忙や不知を言い訳とせず、新しい方法論を積極的に学ぶとともに、研究者としての基本姿勢を大事にしたい。

1　参照URL：http://syasin5.hus.osaka-u.ac.jp/~asarin/semfaq_kano.html
（当日配布資料もダウンロード可能）

2 「有意な共同研究」に関する方法論者からの提言は、狩野による以下の論文をご参照いただきたい。
狩野 裕(2000) 統計学パラダイムの変換に向けて　日本統計学会誌、 30、 305-314.
URL:　http://koko15.hus.osaka-u.ac.jp/~kano/hobby/essay/paradigm.html

SEMFAQ ワークショップを拝聴して
－我々、応用研究者に求められること－

兵庫教育大学　吉田寿夫

のっけから手前味噌になりそうなことを書くが、筆者は、昨年、本ワークショップのパネリストである狩野先生と三浦先生が所属している大阪大学で研究法に関する集中講義をさせていただいた。そして、その際、三浦先生から、『狩野先生の講義にはない…泥臭さ、と言っては失礼な表現になってしまうかもしれませんが、よい意味で「エレガント過ぎない」雰囲気の漂う立場からお話しいただけたのも大変ためになっただろうと思います』というお言葉をいただいた。そこで、調子に乗って、このお言葉を素直に「ほめ言葉」と受けとめ、この参加感想文なるものも、このような立場から書かせていただこうと思う。

さて、この原稿の執筆依頼が舞い込んだとき、筆者は、正直なところ、「うーん、出なきゃよかった。ましてや、出しゃばった質問なんかするんじゃなかった」と後悔した。しかし、非常に有益なご講義を聴けたことに伴うプラス面の方がはるかに大きく、全体としては「やはり参加してよかった」と思っている。また、狩野先生は我々ユーザー（統計法の応用研究者）にとっては雲上人のような存在になりがちな統計の理論家であるにもかかわらず、極力、泥臭い下界に降りてきて、わかりやすい解説をしてくださったと思っている。したがって、まずは、今回のような「勉強させてもらったなあ」と思えるワークショップを企画・遂行してくださったお二人に、あらためてお礼を申し上げたい。

次に、言い訳がましいことを少し記しておく。何を隠そう、筆者は、SEMはおろか、（重回帰分析の繰り返しによる）パス解析も、一度も実際に行ったことはない。また、SEMについてまっとうだと思える勉強は全くやっていない（せいぜい、狩野先生と並ぶSEMの権化である早稲田大学の豊田秀樹氏らが著した『原因をさぐる統計学』というブルーバックスの本を読んだ程度である）。そして、今後も、当面の間は、自分自身がSEMのユーザーになる可能性は極めて低いと考えている。

では、なぜ筆者は今回のワークショップに参加したのだろうか。それは、おそらく、学会誌のレフリーとしてSEMを用いた研究論文を読まなければならないことが頻繁にあるからであろう（学会から送られてくる論文に「→」の記されている図があると「またか」と思ってしまうのは私だけだろうか）。実は、先日、三浦先生から、ご自身が書かれた、このニュースレターの原稿をお送りいただいたのであるが、そこにも記されているように、学会誌のレフリーがSEMを用いた論文に対して的確なコメントをしていかなければ、心理学におけるSEMの適用の質は低下してしまうであろう（特に、「不当な結果の一人歩き」といった憂うべき事態が今以上に蔓延していくであろう）。そして、ここで、なぜ「適用の」という言葉を強調したかと言えば、多くの場合、問題は、SEMという道具そのものよりも、その使い方にあると考えているからである。

さて、SEMを用いた論文を読んでいて問題だと思う主な点は、以下のようなことである（①～③は、SEMを使う場合に限ったことではないが、SEMという道具に惑わされて

問題が顕現化していると考えられる事柄である)。①想定した因果モデルがなぜ妥当だと考えたのか、and/or、なぜ他の影響過程を想定しなかったのか、という基本的なことについての議論が極めて不十分な論文が多い。②測定の妥当性の問題が、あまりにも軽視されている。特に、質問紙調査における、問われていることに対する回答者の内省可能性の問題や反応バイアスの問題への考慮が非常に欠けている。また、「少数の項目で（α係数によって示される）信頼性が高い尺度を構成することは、想定している構成概念に関して偏った測定をすることにつながりかねない」ということがふまえられていない。③因果関係を明らかにするための説得力のあるデータを収集することにつながる工夫・配慮に欠けている（たとえば、共通の反応バイアスの介在を防ぐために変数によって測定方法を変えることや、縦断的調査を行うこと、操作ないし道具的変数と呼ばれる変数を導入したりすることなど)。④データに対するモデルの適合度が過度に注目され、適合度の値が大きいだけで意味あるモデルが提示できたと誤解しているケースが散見される（因果的に先行するものと想定した変数の後続の変数に対する説明力にあまり注意が向けられていない)。

また、「χ^2検定の結果が有意であったから、モデルが正しいことが示された」などという、全くの誤解をしている論文に遭遇したこともあるし、SEMのメリット（？）を論じるうえでのキーワードであろう「(信頼性の低下に伴う）相関の希薄化」ということが多くの人に理解されていないらしい現状を垣間見たこともある。すなわち、上記の①～④のことも含めて、基礎・基本的な事柄についての学習および実行があまりにも不十分だと推察されるケースが数多く見受けられるのである。ただし、上記の①～④に関することの多くは、今回のワークショップでも言及されていた。しかし、それらの重要なことが（エレガントではない筆者の眼から見るかぎり）サラッと（エレガントに）解説されていたため、その重要性が受講者に十分に認識されたか否かについては、いささか疑問である。

では、我々、心理学者は、SEMを使おうとする際、どのような姿勢を持つべきであろうか。筆者としては、いずれも当然のことであるが、SEMそのものについて学習する前に知っておく必要のある様々な基礎・基本的な事柄についての学習をもっと確実にすべきであることと、心理学者としての力量が要求される側面をもっと重視すべきであることを提言したい。前者については紙面の関係で具体的に記すことは省略するが、後者は、言い換えれば、SEMという道具に振り回されずに、本来、心理学者としての味を出す（ないし、頭を使う）べきところにもっとエネルギーを注ぐべきだということである。そして、もう少し具体的に述べるならば、検討するモデルの生成過程や、そのベースとなる理論、さらには、そのモデルの有用性といったことについてじっくり問い直すことが基本的に重要であるし、「我々は、通常、飽くなき多面的な追求が求められる（多分に曖昧な面を有している）構成概念というものを相手にしているのだ」ということを強く認識し、測定の妥当性を高めるためにデータの収集段階にもっと労力をかけることが必要であろう。

提示された紙面をすでにかなりオーバーしてしまった。狩野先生と三浦先生にいくつかのお願いをし、本稿の最後としたい。まず、なんやかやと言いたいことを述べてきたが、今回のワークショップの内容は（SEMを適用しない場合にもためになる）本当に有用なものであった。したがって、今後とも、冗長になっても構わないので、じっくりと時間をかけて、何度もこのようなことを行っていただきたい。それから、心理統計学・心理測定学の専門家である東京大学の南風原朝和氏が、この３月に出版された『教育心理学ハンドブック』の中で『統計でわかること、わからないこと（傍点は筆者)』という視点から、統計的検定やSEMについての解説を行っているが、お二人にも、今後、このような視点を今以上に強く意識して、啓発活動や応用研究者とのコラボレーションを継続していっていただければと考える。また、このことに関連して、SEMが実際の研究においてどのように有効に用いられているかだけでなく、（適用の仕方に原因があるにせよ）SEMがもたらした弊害についてもモニターし、それを我々にフィードバックしていただければと思う。

以上、誠に身勝手なお願いばかりを記したが、あくまで、SEMの妥当な適用のもとに良質な研究が数多く生みだされる（と同時に、不当な研究が横行しない）ことを期待してのことなので、ご寛恕いただければ幸いである。

★★　第５１回大会　南山大学にて開催決定（２００４年5月８日～９日）　★★

第１号通信がすでにお手元に届いていることと思いますが、日本グループ・ダイナミックス学会第５１回大会は、２００４年５月８日～９日に、名古屋の南山大学（大会準備委

員長：津村俊充先生）にて開催されることになりました。
　なお、本大会の開催時期が、開催校の事情により2004年５月になることにともなって、本大会の開催年度を確認しておく必要があります。このことについては、①本大会は2003年度大会（2003年度事業）であること、②2004年度大会（52回大会）は2004年度中に開催されるように準備を進めること、の２点が常任理事会で確認されています。改めてここでご報告させて頂くとともに、渥美会長を中心に、52回大会の開催校・開催日程の決定を急いでいるところです。

大会準備委員長をお引き受けいただいた南山大学の津村俊充先生からのご挨拶です。

ご挨拶

　日本グループ・ダイナミックス学会の大会は、今回で第５１回を迎えます。昨年度の大会が第５０回という半世紀のまとめの大会であり、今大会が次の半世紀に向かう、新しい節目の大会です。この新しい門出の記念すべき大会を、名古屋の地で開催できることをうれしく思うと共に、その責任の重さを感じております。2003年度大会として、本来ならば、2003年度内に開催すべきでありますが、南山大学におきましては大学院開設の重要な年度になっております。大学院構想では、グループ・ダイナミックスの創始者ともいわれるクルト・レヴィンらにより開発されたラボラトリー・メソッドによる人間関係トレーニングに代表される体験学習のファシリテーター養成もめざした教育ファシリテーション専攻といった名称で認可申請しております。無事に認可されました際には、年度末は広報・入試といった開設に関わる業務が重なることから、学会理事会にはご無理をいって、開催時期は2004年5月8日（土）、9日（日）とさせていただくことになりました。長い連休後の土・日ゆえ、参加者数がどのようになるのか少々心配しておりますが、多くの方々にお集まり頂き、活発な議論が行われますことを願っております。
　今大会では、これまで以上に日本の社会心理学者による基礎的な研究から応用実践研究に至るまで幅広いグループ・ダイナミックス研究者の交流の場となることを願って、プログラムを検討し始めています。今大会のモットーに、多くの方々の参加と参加者間の相互作用が広く深く起こることを念願して、"インタラクティブに！"を掲げてみました。具体的には、従来のワークショップの概念を広げ、グループ・ダイナミックスに関わる実践やトレーニング方法の体験ができるプログラムも含めた、"インタラクティブ・プログラム"と題した約2時間のプログラムを実施する予定です。ぜひ、ふるってご企画ください。気持ちだけが前に走り、大会の企画・運営に行き届かないところも多いかと思いますが、できるだけ皆様方のご期待に応えうる第５１回大会にしたいと考えています。 ご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、大会までの大まかな日程は、

１号通信発送	２００３年	８月中旬
発表申し込み締め切り	２００３年	１１月末
発表原稿締め切り	２００４年	１月末
論文集発送	２００４年	４月上旬

をそれぞれ予定させて頂いております。
また、大会に関するお問い合わせ・連絡先は、
〒466-8673　名古屋市昭和区山里町18　南山大学人文学部心理人間学科内
Fax:052(832)3217　E-mail:gd-51@nanzan-u.ac.jp（「GD学会準備委員会宛」と明記してください）
※お問い合わせは、FaxまたはE-mailにてお願い申し上げます。

第51回大会準備委員会　委員長
津村　俊充（南山大学）

　津村先生を始め、準備委員の皆様、よろしくお願い致します。なお、同大会のホームページは、すでに次のＵＲＬで公開されています。
http://www.nanzan-u.ac.jp/GD51/

★★　三隅賞決定　★★

三隅賞選考委員長　　渥美　公秀

2002年度の三隅賞は、「三隅賞規定」に基づいて推挙された三隅賞選考委員会がAsian Journal of Social Psychology Vol.5に掲載された論文を対象に評価・協議しました結果、

Liu, J.H., Lawrence, B., & Abraham, S. (2002) Social representations of history in Malaysia and Singapore. AJSP, 5, 3-20.

に決定いたしました。
先日、フィリピン、マニラで開催されましたアジア社会心理学会大会で、2001年度の三隅賞（Matsumoto, D., & Kupperbusch, C. (2001) Idiocentric and allocentric differences in emotional expression, experience, and the coherence between expression and experience.)とともに表彰し、賞状を授与いたしました。2002年度受賞者には賞金を、当日欠席された2001年度受賞者には賞状と賞金を後日お贈りすることとしました。
なお、授与された皆様からの喜びの声は、今後のニュースに掲載させて頂く予定です。
最後に、授与式では、参加者全員で、故三隅二不二教授を偲んで１分間の黙祷を捧げましたことをご報告いたします（渥美）。

★★　アジア社会心理学会のご報告　★★

アジア社会心理学会　前会長　山口　勧

アジア社会心理学会マニラ大会に際しましては、会員の皆様に多大なご心配をおかけいたしましたことをお詫びいたします。春にはSARS騒動、大会直前にはクーデター騒ぎということで、安全性についての懸念から発表をキャンセルなさった方にはたいへん申し訳なく存じます。
大会直前にJGDA_Flashでもお伝えしましたように、現地の準備委員会と何度も連絡をした末、大会を決行することにいたしました。私どもも100パーセントの確信はありませんでしたが、169名の方にご参加いただき、盛況のうちに無事大会を終えることができました。クーデター騒ぎの直後にもかかわらず、日本からも二十数名の方にご参加いただき、感謝しております。なお、マニラ市街は驚くほど平穏でありました。
なお、この大会をもって私の会長としての任期は終了いたしました。任期中は皆様に多大なご支援をいただきありがとうございます。今後二年間は、台湾国立大学のKwan-ko Hwangさんが会長職を務めることになります。また、次期会長にはニュージーランドのColleen Wardさんが選出され、2005年の第六回大会はニュージーランドのWellingtonで開催されることになりました。開催時期ですが、こちらの夏はニュージーランドの冬にあたり、気候がよくないため、2005年４月はじめを考えています。
以上、アジア社会心理学会マニラ大会のご報告を申し上げ、あわせて、これまでのご支援に御礼申し上げます。

★★　第5回ＡＡＳＰ大会印象記　★★

第5回ＡＡＳＰマニラ大会の印象

東京大学大学院人文社会系研究科　有泉　優里

マニラ大会に行ってきたというと、直前のクーデター事件について尋ねられる。武装騒ぎは、日本では歴史的大事件になるかもしれないが、フィリピンの感覚では、「よくあること」らしい。同じ現象でも文脈によって解釈される意味が異なるとはこのことである。事実、事件は交渉によってあっさり解決され、大会は平穏に開催された。公共施設の警備が厳しくなったらしく、かえって安心感が増した。

南国のリゾートホテルが会場であったせいだろうか、何といってもあの解放感。日本のしがらみも忘れ、心軽く発表、議論できる雰囲気が心地よかった。毎昼の食事会での歓談、気の利いたコーヒーブレイク、様々な基調講演、スタッフ達の行き届いた気配りと、素晴らしい企画・運営であった。また、夕方に各国の大学院生達と一緒にレストランへ行き、晩くまで談話したときの楽しさは今でも忘れられない。

発表では比較文化的研究だけでなく、個々の文化的文脈における研究も多かった。中でもAmaeに関する研究報告は４つあり、私も発表者の一人であった。発表後、こんなエピソードはAmaeにあたるのかなどと熱心に話し掛けてくれる人がいつになく多かった。その夜、香港の大学院生たちの間でAmaeが話題となり、主に恋愛関係の文脈で話が盛り上がったとのことである。Amaeは日本的概念かもしれないが、異文化の人々は自分の周りの現象にそれを当てはめ、実際に似たような経験をしていることに気付くらしい。今学会ではそれを目の当たりにした。固有文化概念を分解することで異文化の人にも理解することが可能になり、既存の理論で説明できない要素を取り出すことによって、比較文化研究につながると考えている。AASP会長に就任されたK. Hwang先生のお話にもあったように、時間はかかるだろうが、固有文化心理学はグローバルな心理学へ到達していくのかもしれない。

多くがアジア出身の参加者ということでとりわけ興味深かった発表は、J. Liu先生や渥美公秀先生による人々の歴史認識についての調査報告であった。とくに渥美先生の研究では日本人の歴史認識を扱っており、各国の聴衆は熱心に聞き入っていた。政治とは別に、学術的研究が望まれている分野ではないかという印象を受けた。アジアの人々を意識した研究はこれからも増えてくのではないだろうか。

★★　杉万俊夫氏　Enriquez賞受賞　★★

渥美　公秀

アジア社会心理学会マニラ大会準備委員会は、フィリピンの社会心理学を基礎づけたとされる故Virgilio G. Enriquez教授の価値観や考え方を最もよく反映している発表論文として、杉万俊夫教授の論文を選び、表彰しました。その後、メモリアル講演の場が設けられ、杉万氏は、選ばれた論文”Human Sciences: An Alternative to Natural Science”を１時間にわたって講演し、会場との活発なやりとりも展開されました。

Enriquez教授は、心理学にindigenousな視点を持ち込んでフィリピンの社会心理学をリードし、健康、教育、農業、法、スポーツなど多様な分野への応用研究を推進しました。ノースウエスタン大学でPh.D.を取得後、1963年よりフィリピン大学で教鞭をとりました。日本にも滞在されたことがあり、わが国の心理学者とも交流がありました。

★★　２００３年度第１回　常任理事会・常任編集委員会議事録　★★

日時：2003年５月１１日　13:00-17:00
場所：大阪大学人間科学部
出席者：渥美・大渕・廣岡・大橋・山口・矢守・吉田

常任理事会

【報告事項】

総務
１．渥美会長より、三隅賞選考委員会は、グルダイより3名（渥美会長、大渕常任理事、山口常任理事）、アジア社会心理学会より２名（Kwok Leung、 K. K. Hwang）の計5名で構成されることが報告された。早速、堀毛前会長より引継ぎを受けうえで、基本的にはメールで選考をすすめていくことが了承された。
２．学術会議会員・同委員の手続きについて渥美会長より、学術会議会員候補者は大坊先生、推薦者は相川先生、安藤先生として申請済であり、委員については、学術会議からの

連絡を待っているとの報告があった。

広報
１． 廣岡常任理事より、ＮＬ24号が印刷中、来週にも配布予定であるとの報告があった。主な内容は第50回大会の記録、総会報告、前・新会長の挨拶。
　ＮＬ25号は第50回大会ＷＳへのコメント、第1回常任理事会の議事録等を掲載し、6月に発行予定である。

将来計画
１．渥美会長より、総会時の配付資料をもとに、松井前常任理事からの申し送り事項が報告された。議論の結果、研究委員会は矢守常任理事、松井前常任理事（会員）のほか、あと2名（理事1名、会員１名）を矢守常任理事が選出し、次回の常任理事会で報告されることとなった。
　今後：開催講座の拡充ならびに新規事業に取り組んでいくことを申し合わせた。

渉外
１．渥美会長より、科研（AJSP・実験社会心理学研究）の申請が不採択であった旨、報告があった。
２．中西印刷との交渉（オンラインジャーナル）について渥美会長より報告があった。
　課題：認証システムの費用確認、雑誌購入を希望しない会員の会費を値下げした場合の収支案などを次回の理事会までに調べておくこととなった。

会計
１．渥美会長より、2002年度の決算は5月末に学会事務センターより提出され、次の総会で監査報告をおこなうとの説明があった。
２．小口会計（事務局預かり）について順調にすすんでいるとの報告が渥美会長より行われた。
３．渥美会長より、第５０回大会精算について、次のように報告があった。
　前大会（熊本）と比較し、参加者数は約100名増加し100万円あまりの増収があったが、外部の会場を借りたため、会場費（設営費、機材貸出し費用、スタッフの人件費など）ならびにアルバイト代等がかかり、支出合計は約47万円の赤字となった。今大会が理事会主催の記念大会であったため、一般会計予備費（繰越金から予備費として）補填することが承認された。
４．渥美会長より、2003年３月末現在の会員数が別以下のとおり報告された。
　会員数８６０名（一般７３６名、学生１０５名、賛助４名、名誉１５名）

【審議事項】

１．渥美会長より、全体的な方針について別紙のとおり報告された。
２．渥美会長より、雑誌改革について提案があり、討論が行われた。
　「実験社会心理学研究」という名前には拘らないこと、「実験」という言葉をはずすことの意味については、全員が理解した。誌名や編集方針については、様々な意見が出されたので、会員から広く意見を募る方針のもと、その具体的な方法について議論した。渥美会長が、提案趣旨を文章化することが確認された。また、渥美会長より、次回までには、各常任理事が周辺の情報を収集しておくよう依頼があった。
３．大渕常任理事より、選挙規定改定については来年あたりに手掛けていく予定であるとの報告があった。
４．引き継ぎ項目について
（１）渥美会長より、中西印刷への学会事務移行に関する説明が別紙のとおり行われた。
（２）倫理規定検討委員会設置については、必要であるとの合意がなされ、将来計画担当の吉田常任理事が状況調査を行うこととなった。
（３）会員制度は、継続審議とした。
（４）会費未納者の取り扱いに関しては、会費２年滞納で雑誌の送付を止め、意思確認のアナウンスをしたうえで、未納が３年に及んだ場合、自動的に除名扱いとする旨が合意された。また、会費未納の退会希望者の取り扱いに関しては、支払い義務はあるので請求はするが、手間を省くうえでも、追跡はぜずに自動的に切るとの意見でまとまった。今後、

理事会に諮ることとした。

常任編集委員会

【報告事項】

渥美編集委員長より引き継ぎ状況についての報告がされた。

【審議事項】

１．投稿・審査状況について渥美編集委員長より、一覧表をもとに報告があった。
２．渥美編集委員長より、副編集長について、実験系の論文に関しては大渕常任理事に、フィールド系の論文に関しては矢守常任理事に副編集長となっていただき、各副編集長に相談のうえ、主査を決定する作業等をすすめていく旨が提案され、了承された。

★★　２００３年度第２回　常任理事会・常任編集委員会議事録　★★

日時：2003年７月２１日　13:00-17:00
場所：大阪大学人間科学部
出席者：渥美・大渕・廣岡・大橋・山口・矢守

常任理事会

【報告事項】

総務
１．心理学諸学会連合理事会について
　渥美会長より、同理事会において、心理学関係の資格、検定試験のあり方について議論が進められていることについて報告があった。
２．学術会議会員等の決定について
　渥美会長より、人文学系研究評価専門委員会評価員に、杉万俊夫氏が選出されたことが報告された。
３．三隅賞・ＡＡＳＰについて
　渥美会長より、三隅賞の選考作業について報告があった。選考規定に基づいて、選考委員の大渕常任理事、山口常任理事、渥美会長が、日本側の選考作業を進め、アジア社会心理学会側の作業状況をも踏まえつつ、ＡＡＳＰマニラ大会に臨むことが確認された。
４．研究委員会報告
　矢守常任理事より、本年度の研究委員会を、山口勧氏、松井豊氏、渡邊としえ氏、矢守の４人で構成すること、および、本年度の活動方針について、別紙資料に基づき報告があった。

広報
１．ぐるだいニュースの発行について
　廣岡常任理事より、諸般の事情により次号（２５号）は刊行予定が少々遅れ、８月を目途に刊行するとの報告があった。
２．ホームページの運用について
　廣岡常任理事より、引き続き、三浦氏（大阪大学）の助力をえながら、日常の運用、および、審査プロセスのＷＥＢ化に伴う中西印刷との折衝を進めていくとの報告があった。

将来計画
１．倫理規定について
　吉田常任理事より、資料に基づき、基本方針について問題提起があり（吉田常任理事欠席のため、渥美会長が代行）、今後、ＧＤ学会として倫理規定を作成することを前提に、

吉田常任理事を中心に、他学会の動向も見極めつつ検討していくこととなった。

渉外
１．中西印刷との交渉→審議事項１へ

会計・事務
１．2002年度決算について
　渥美会長より、決算が遅れているがまもなく完了予定との報告があった。
２．第50回大会精算について
　渥美会長より､前常任理事会で承認した支払いについて無事終了したとの報告があった。
３．会員異動について
　渥美会長より、2003年６月末時点での会員異動について報告があった。
　会員数８４９名（一般７２０名、学生１０９名、賛助４名、名誉１６名）

【審議事項】

１．オンラインジャーナル（ＯＬＪ）について
　渥美会長より、前常任理事会以降の経緯（中西印刷との交渉過程）について報告があった。その後、個人、あるいは、機関購入（大学図書館など）に対する認証システムの必要性（非会員の閲覧の可否）、ＰＤＦファイルのセキュリティ（ダウンロード、プリントアウトの可否）などについて審議した。その結果、①認証システムはとらない、他方、②ＰＤＦにはセキュリティをかけることを基本方針とし、その上で、ＯＬＪ化に伴う機関購入のあり方、会員減の可能性等、残された課題について検討を進めることになった。
２．51回大会の日程について
　廣岡常任理事より、51回大会（南山大学）については、すでに準備委員会が結成され準備が進められているとの報告があった。また、本大会の開催時期が、開催校の事情により2004年５月になることについて、①本大会は2003年度大会（2003年度事業）であること、②2004年度大会（52回大会）は2004年度中に行うことを、ニュースレターを通じて会員に周知するとともに、渥美会長を中心に、52回大会の開催校・開催日程の決定を急ぐことが確認された。
３．常任理事間の役割分担について
　渥美会長より、各事業の効率的推進のためワーキング・グループを作り、今後、常任理事が分担して事業・作業を進めてはどうかとの提案があり、原案通り承認された。
４．雑誌改革について
　渥美会長より、前常任理事会の審議結果に基づき、学会誌名の変更に関する提議書が提示された。提議書に基づき、学会誌名変更の基本方針（グループ・ダイナミックスを広義にとらえるのか狭義にとらえるのか、社会心理学（会）との差異化など)、および、セクション名の適否、などについて種々審議された。その結果、①提議書の内容を、雑誌名に関する会長からの問題提起とその改定試案（たたき台）の提示という形式で再編し、②ニュースレター（次号）を通して会員に広報するとともに、③会長、常任理事、理事等が各地区の会員から直接、問題提起と改訂試案に対する意見を収集する機会を設けること、および、④上記の①～③について、メイリングリストを通じて理事に事前に報告・依頼すること、以上４点が確認された。

５．ヒューマンコミュニケーション基礎研究会共催について
　大坊郁夫氏より、表記について依頼があり異議なく承認された。

常任編集委員会

報告事項
　渥美編集委員長より、改稿遅延者への督促、審査遅延者への督促、会費未納の投稿者への勧告について、報告があった。

審議事項
１．投稿・審査状況について

渥美編集委員長より、別紙資料に基づいて報告があった。

２．審査規程について
渥美編集委員長より、審査者より、審査依頼状にある「審査規程」の所在を質す意見が寄せられているとの報告があった。審議の結果、堀毛前会長が提案し、総会で認められた「『実験社会心理学研究』編集方針・編集体制」（本ＮＬ記事参照）が、「実験社会心理学研究」の審査規程であることを確認し、同文書をＨＰ上にアップするとともに質問者に参照を求めることとなった。

★★　２００３年度第３回　常任理事会・常任編集委員会議事録　★★

日時：2003年９月１５日　15:30-17:00
場所：東京大学法文２号館
出席者：渥美・大渕・廣岡・大橋・山口・矢守・吉田

常任理事会

【報告事項】

■総務
１　ＡＪＳＰ著作権料について
渥美会長より、約25万円の収入があったとの報告があった。

■広報
１　ぐるだいニュース
諸般の事情で刊行時期を遅らせ、９月刊行を目途に編集作業が進められている。ＡＡＳＰフィリピン大会報告、実験社会心理学研究43巻1号掲載予定論文リストなど、最新の情報も盛り込む予定との報告が、廣岡常任理事よりあった。
２　ホームページ
廣岡常任理事より、実験社会心理学研究の編集方針を新たに搭載したとの報告があった。

■会計・事務
１　2002年度決算および監査の報告
渥美会長より、資料に基づいて報告があった。
２　会員異動
渥美会長より、特段の変化は認められず例年並みで推移していること、および、詳細は次回常任理事会で報告予定であるとの報告があった。

【審議事項】
ＷＧを中心に検討を進めてきた下記事項について審議した。

■大会関係
廣岡常任理事より、次回南山大学大会について、１号通信が発行されたこと、順調に準備が進行しつつあることについて報告があった。また、渥美会長より、ＡＡＳＰマニラ大会において、南山大会に“English session”への海外からの自主参加者（invited speaker以外の参加者）が見込まれるとの報告があり、その扱い（発表資格、会員資格など）について検討した。その結果、南山大会では、基本的には積極的に受け入れる方向で、具体案（非会員の大会参加資格、参加費レートなど）を、今後常任理事会として検討していくこととなった。

■将来計画
吉田常任理事より、学会倫理規定の原案が提起された。事細かな規定を作成するより

は、包括的な方向性（指針）として定める方針が提示され、異議なく了承された。また、今後、吉田常任理事を中心に、細部をつめていくこととした。なお、論文審査にも、倫理上の観点を反映させるべきこと、同規定は、雑誌掲載論文だけでなく大会発表にも適用していくべきこと、などを確認した。

■事務移行
　矢守常任理事より、資料に基づいて経過報告がなされ、原案通り異議なく了承された。

■オンライン・ジャーナル
　渥美会長、および、廣岡常任理事から、中西印刷との事務打合せの経過について報告があった。
　前回からの懸案事項については、①（非会員からの）アクセスは自由、ＰＤＦのコピー＆ペーストは不可との方針で当面運営すること、②将来的には、コピーの可能性、HTML形式化についても検討すること、を確認した。
　また、今後の具体的手順についても審議し、その結果、①現在編集が進行中の43巻１号をテストケースとして、著者の了解を得ながら、オンライン化を進めること、②今後、可能であれば、先方よりテストケースとして無料試作の提示がある42巻１、２巻についてもオンライン化を検討すること、③本格的なオンライン化に備えて、投稿規定の一部修正、著作権の扱いについての確認、などの事務作業を進めること、以上を確認した。
　なお、編集システムのオンライン化については、検討すべき問題点も多いので、今後、時間をかけて検討することとなった。

■選挙・選挙改革
　大渕常任理事より、次回常任理事会で検討を開始したいとの報告があり、異議なく了承された。

■雑誌改革（雑誌名の変更）
　渥美会長より、資料（渥美会長による提案書、および、それに対する全理事からのレスポンス）が提示され、経過説明があった。
　審議の結果、第1に、提案の経緯、提案の内容いずれについても、賛否両論があったこと、第2に、いずれにせよ、学会の根幹に関わる重要事であるので広く会員の意思を問うべき問題であることについては、常任理事を含め理事の合意が得られていると考えられること、以上の2点を確認した。
　その上で、これまでの経緯が、
①渥美会長就任時に方針を総会で提示、
②常任理事会で検討の結果、理事からの意見聴取を決定、
③理事からのレスポンス（上記の通り、賛否両面の意見が得られ、かつ、会員の意思確認の必要性が指摘された）であったとの認識
のもと、今後、
①理事から得られた賛否両論を集約し、
②集約内容の是非を理事に確認の上、
③上記①・②の結果をニュースレーター、ホームページ、電子メイル（フラッシュニュース）、南山大会開催に伴う通信などを通じて全会員になげかけ、
④一般会員からの意見を聴取し、
⑤上記④の結果をとりまとめ、
⑥次回大会（南山大会）で総会議題としてではなく、広く議論すべき場を設ける、
以上の方針で今後、慎重に検討を進めていくことを確認した。

常任編集委員会

　渥美編集委員長より、審査・編集状況について、資料に基づき報告があり、異議なく了承された。
　また、本委員会で新たに受理された論文４本を加え、43巻1号は、原著５本、資料２本、特別記事１本で構成し、2003年11月（予定）、刊行することになった。

【その他】
次回常任理事会は、2004年１月開催を目途に、日程調整を進めることになった。

★★　「実験社会心理学研究」編集方針・編集体制　★★

堀毛前編集委員長のご盡力により、“「実験社会心理学研究」編集方針・編集体制 ”が明文化され、本年３月京都で開催された総会において会員の皆様にご承認頂きました。
以下、その全文をご紹介させて頂きます。また、グルダイHP上でも閲覧可能です。

http://wwwsoc.nii.ac.jp/jgda/edit_policy.html

【編集方針】

本誌の刊行目的は国内研究の醸成・活性化である。従って、論文審査の基本方針は、投稿論文の欠点を指摘して掲載不可とするのではなく、貢献可能性を見つけだし、それが十分に展開されるよう援助することである。ただし、その貢献可能性が極めて小さかったり、科学的論文としての要件を満たしていないものは掲載不可の判断もやむを得ない。
会員の研究成果をできるだけ早く公表するために、迅速な審査を心がける。著者に対する最初の審査結果通知は、投稿後3ヶ月以内に行う。また、掲載決定された論文はできるだけ早く公刊する。なお、最初の審査結果通知までに要した期間等、論文投稿状況に関する統計データを、３ヶ月ごとに学会HPに掲載する。

【論文審査規定】

１（投稿要件の確認）新規投稿にともない、編集事務局は、当該論文が投稿要件（著者が本学会の会員であること）を満たしているかどうか確認する。筆頭著者は原則として本学会の会員でなければならない。連名者に関しては、常任編集委員会の承認を経たうえで、必要に応じ会員以外の者を含めることができる。

２（二重投稿のチェック）論文の到着月日を受稿月日として筆頭著者に通知する。そのさい、内容が重複している論文等を既に公刊（公刊予定を含む）しているか確認し、該当するものがある場合には、現物もしくはコピーを２部、編集事務局に送るよう依頼する。二重投稿の疑いがあるものについては、編集委員長、副編集委員長（以下副委員長）、主査が決まっている場合には主査も加わり、協議を行う。二重投稿と判断されたものは、常任編集委員会の承認を経た上で、受稿を拒否したりあるいは審査を打ち切る。

3　（再投稿規定）以前に掲載不可もしくは取り下げとなった論文が別論文として再投稿された場合には、前回の主査と編集委員長との協議により、別論文とみなせるかどうか判断を行う。別論文と判断された場合には、通常の受稿手続きに移行する。別論文とみなせないと判断された場合は、常任編集委員会の承認を経た上で、受稿を拒否したりあるいは審査を打ち切る。

4　（主査の決定）投稿要件を満たすことが確認され次第、編集委員長は、副委員長と協議し、2週間以内に主査を決定する。主査は原則として本学会の理事とする。主査の決定にあたっては、著者との関係（過去にその学生の指導教官だったことはないか、同じ研究室の出身ではないか、など）に配慮する。著者に編集委員長または副委員長が含まれる場合、もしくは著者が編集委員長または副委員長の指導学生である場合、該当する一方は協議に参加せず、残る一方の責任で主査を決定する。

5　（主査への依頼）主査が決定したら、編集事務局より投稿論文を送付するとともに、審査期限が投稿受付時から3ヶ月以内であることを明確に伝える。ただし、主査に事情のある場合、１ヶ月以内の延長は許容する。その折に上記の理念ならびに編集方針を伝え了解を図る。

6　（副査の推薦）主査には著者を顕名で伝える。主査は定められた期限（2週間）以内に２名の副査を推薦し、編集事務局に連絡する。そのさい、副査には原則として１ヶ月以内に審査を行うことについての了承を得ることとする。副査の審査は匿名とするが、推薦にあたっては著者との関係を考慮する。副査は理事に限定せず、必要があれば非会員でも可とする。

7　（副査への依頼）編集事務局は、主査の推薦に基づき、著者や所属・謝辞等が記載された１ページ目を除いた原稿を副査に送付し１ヶ月以内に審査結果を主査に送付するよう依頼する。その折に上記の編集方針を伝え了解を図る。

8　（コメントの作成）主査は２名の副査の評価にもとづいて、論文の掲載可否ならびに改稿の必要性を判断し「総合コメント」を作成する。総合コメントは副査の審査を重視しつつ行うことを原則とするが、見解が対立した場合の改稿方針の決定や掲載の可否判断は、あくまで主査の責任で行うものとする。作業が終了したら、主査は、総合コメント、２名の副査のコメント、論文評価用紙を編集事務局宛送付する。評価用紙には、掲載の可否もしくは改稿原稿を主査のみので審査するか副査も含めて審査するか明記する。

9　（コメント作成の指針）主査・副査はコメントの作成にあたり以下の諸点に配慮する。
　１）最初のコメントにおいて論文の問題点を可能な限りすべて指摘する。改稿により大幅な変更が予想される場合などは、「改稿原稿を見た上で、改めて審査する」ことをつけ加える。
　２）著者は最初のコメントで指摘された問題点を解決すれば掲載可になると受け取る傾向があるので、再審査において、前回触れなかった新しい問題点を指摘する場合には、その理由（例えば、「改稿によって新たな問題が生じたから」など）を著者に説明する。
　３）コメントは、重要事項と参考事項を区別して記す。
　４）コメントの量は、できるだけＡ４用紙３枚以内にまとめるよう留意する。著者の改稿意欲を促すように、建設的コメントを心がける。文言等、詳細な事柄の指摘にあたっては、必要に応じ投稿原稿への書き込みを行い、コメントともに編集事務局（副査の場合は主査）に送付する。
　５）コメントの作成にあたっては、丁寧な表現を用いることを心掛け、著者の人格を傷つけるようなことがないよう注意する。

10（審査の超過期限）編集事務局は、審査期限を２ヶ月超過しても連絡のない場合には、主査に審査状況の問い合わせを行う。審査を依頼してからを６ヶ月を経てもコメントが返送されない場合、編集委員長は常任編集委員会の審議を経て、審査者に状況説明を求め、必要に応じ主査・副査の交替を行うことができる。また、主査もしくは副査に審査が続行できない事由が生じたさいには、編集委員長と副委員長の協議により、審査者の交替を含めすみやかに対応を図る。

11（審査結果の通知）編集事務局は、論文評価を示す連絡とともに、主査の総合コメントと２名の副査のコメントを筆頭著者に送付する。編集事務局は両副査に主査の総合コメントならびにもう一方の副査のコメントを送付する。

12（論文の改稿）著者は、総合コメントにしたがい論文の改稿を行う。改稿論文を送付するさいには、総合コメントにどのように対応したか明確になるような対照表を添付する。必要に応じて、両副査のコメントに対する対応も併記する。そのさい、審査者のコメントに対する反論や、指摘された点に関し改稿できない事由等があれば、対照表の中にきちんと明記する。

13（改稿の期限）改稿が指示された場合、期限は原則として2ヶ月とするが、初回改稿時に限り最大6ヶ月まで延長できるものとする。また、改稿期限を２ヶ月超過しても著者から連絡のない場合には問い合わせを行う。

14 （審査の打ち切り）審査結果の通知を行ってから１年を経ても改稿がなされない場合、編集委員長は常任編集委員会の審議を経て、著者に状況説明を求め、必要に応じ取り下げの勧告を行うことができる。

15 （再審査）改稿論文が送付されてきたら、編集事務局は前回の主査・副査のコメントを添付したうえで、改稿論文を主査（副査を含めた再審査の場合には副査にも）に送付する。再審査の審査期限は、副査を含む再審査の場合は２ヶ月以内（副査の審査期限は１ヶ月以内)、主査のみの場合は１ヶ月以内とする。再審査の超過期限に関する措置は10項に準ずる。

16 （審査経緯の報告）主査は論文の審査が終了した時点で、編集委員長に対し掲載可否に関する結果を提案するとともに、審査経緯について簡単な報告を行う。

17 （掲載決定と受理）主査から掲載可の提案がなされた場合、編集委員長と副委員長との協議により、審査手続きや論文の形式上の問題についてチェックを行う。問題点が見受けられた場合、主査に連絡をとるとともに、編集事務局を通じ、必要に応じて著者あるいは審査者に連絡をとり、対応を依頼する。問題がなければ、編集委員長は、副委員長との協議結果、および主査による審査経緯の説明を常任編集委員会に提示し、審議を経て論文の受理決定を行う。結果はただちに筆頭著者に伝達する。

18 （掲載不可決定）主査から掲載不可の提案がなされた場合、編集委員長は、第17項と同様の手続きを経たうえで、副委員長との協議結果、および主査による審査経緯の説明を常任編集委員会に提示し、審議を経て論文の掲載不可決定を行う。結果はただちに筆頭著者に伝達する。

19 （異議申し立て）著者は、毎回の審査結果あるいは掲載可否の決定について異議のある場合、編集委員長に対し異議を申し立てることができる。異議申し立ての期間は、結果の受領後１月以内とし、原則として著者もしくは連名者が行うものとする。異議が申し立てられた場合、編集委員長は、副編集委員長および当該論文の主査と対応を協議する。必要に応じて副査に意見を求めることもある。協議結果は１月以内に著者に連絡する。著者から再度異議申し立てがなされた場合、編集委員長は常任編集委員会を開催し、経緯報告を行ったうえで対応を審議し、結論が得られ次第、筆頭著者に伝達する。

20 （論文の取り下げ）著者は、事情に応じ論文の取り下げを行うことができる。その場合、簡単な事由を添付したうえで、編集事務局に連絡する。編集委員長は副委員長と協議のうえ、常任編集委員会に諮った上でこれを承認する。

【特集】

「特集」は随時組むこととし、ひとつの明確な方向性をもつ３－４論文で構成する。著者は会員に限定しない。「特集」のテーマは、広く会員に公募し、常任編集委員会で検討する。ただし、「特集」によって、一般論文の掲載遅延が生じることは避ける。

【編集体制】

実験社会心理学研究を発行するために次の役員をおく。１）編集委員長、２）副編集委員長、３）常任編集委員、４）編集委員、５）編集事務局。編集委員長は会長が兼務するか、もしくは常任理事会の協議により常任理事の中から選出する。副委員長についても常任理事会の審議により、常任理事の中から選任する。常任編集委員は常任理事が兼務する。ただし、編集委員長が運営上必要と認めた場合は、理事以外から若干名を委嘱することができる（会則第３３条)。編集委員は実験社会心理学研究の発行に関する基本的事項を審議し、運営上の最終責任を負う。常任編集委員会は、実験社会心理学研究の質的な発展と向上に資するための活動を行うとともに、所定の手続きを経て審査された研究論文の掲載等につき、最終的な決定を行う（会則第３４条：一部)。

★★　実験社会心理学研究　第４３巻１号掲載決定論文　★★

＜一般論文＞
【原著論文】

高木　邦子　　不快情動経験と責任帰属が否定的対人感情の形成に及ぼす影響
沼崎　誠・工藤　恵理子　自己高揚的呈示と自己卑下的呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果
工藤　恵理子　対人認知過程における血液型ステレオタイプの影響
伊藤　君男　　被説得者の印象志向動機が内集団成員による説得的メッセージの処理に及ぼす効果
小川　一美　　初対面時の会話における発話量の均衡の効果－観察者による印象への影響

【資料論文】

大坪　庸介・島田　康弘・森永　今日子・三沢　良　　医療機関における地位格差とコミュニケーションの問題：質問紙調査による検討
相馬　敏彦・山内　隆久・浦　光博　　サポート関係における排他性がサポート源との葛藤時の対処行動選択に与える影響

４３巻１号に掲載予定の論文の受理までの平均月数は24.32ヶ月、取り下げを含む初回審査平均月数は4.7ヶ月でした。2003年度になって１６編のご投稿をいただきました。皆様是非ご投稿をお願い申し上げます。

★★　会員移動　★★

＜Web上にて省略＞

★★　事務局からのお願い　★★

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集
事務局では、実験社会心理学研究の特集号テーマを随時募集致しております。詳細は事務局までお問い合わせください。
◆実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★　広報担当からのお知らせ　★★

◆広報担当は、新刊本に関する情報を広く募集しています。グルダイ会員に紹介したい書籍がありましたら、広報担当までご推薦ください。
◆ホームページは **http://wwwsoc.nii.ac.jp/jgda/** です。なお、このページに関するご意見・ご要望は、広報担当常任理事の廣岡（三重大学：**shuhiro@edu.mie-u.ac.jp**）もしくはHP担当幹事の三浦（大阪大学：**asarin@syasin5.hus.osaka-u.ac.jp**）までお知らせください。
◆**JGDA_Flash**：グルダイでは【日本グループダイナミックス学会・広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash)を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約５５０名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思いますが、登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、グルダイ広報メールマガジン運営担当マスターのアドレス

jgda_flash@epsycho.edu.mie-u.ac.jp

までお願いいたします。また、新刊案内や研究会案内等のニュース記事も大歓迎いたします。同アドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、

http://wwwsoc.nii.ac.jp/cgi-bin/jgda/magbbs.cgi

で閲覧可能です。

★★　グルダイ学会関係連絡先　★★

◆投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見◆
大阪大学人間科学部　渥美公秀研究室
〒565-0871　吹田市山田丘１－２　　大阪大学人間科学部
電話＆Fax: 06-6879-8066　　E-mail：**CXC02237@nifty.ne.jp**
◆学会事務局◆
大阪大学人間科学部　渥美公秀研究室
〒565-0871　吹田市山田丘１－２　　大阪大学人間科学部
電話＆Fax: 06-6879-8066　　E-mail：**CXC02237@nifty.ne.jp**
◆ぐるだいニュースへの投稿・JGDA_Flashへのニュース記事投稿◆
三重大学教育学部　廣岡秀一研究室
〒514-8507　三重県津市上浜町１５１５　三重大学教育学部
電話・Fax：059-231-9329　　E-mail：**jgda_flash@epsycho.edu.mie-u.ac.jp**
◆住所・所属変更
日本学会事務センター大阪事務所（学会センター関西　担当：山田範子）
〒565-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
TEL　06-6873-2301　FAX 06-6873-2300　E-mail：**nyamada@bcasj.or.jp**

（編集後記）■第24号での予告通り、25号のぐるだいニュースは、京都で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第50回大会の「大会企画特集号」と銘打って編集させて頂きました。■原稿は随分早くに頂いたにも拘わらず、諸般の事情でこんな時期の発行になってしまいました。本NLにご寄稿頂いた皆さんには約５ヶ月もの間、玉稿を眠らせてしまったことになります。この場を借りてご執筆頂いた先生方にお詫び申し上げます。誠に申し訳ございませんでした。■第51回の大会の準備もすでに始まっています。みなさん、各種申し込みの期限をお忘れなく。■来年４月の事務一本化およびOLJへの実務的な対応が進められています。会員異動については確実にお知らせ頂きますようお願い致します（廣）。

＜ＳＰＳＳ社広告挿入＞